

白川郷・合掌集落訪問調査

鈴木 誠

はじめに

地域経済研究所主催の飛騨交流会も今回で3回目を迎える。今回は、2月28・29日の2日間にわたり、昨年12月6日に「世界文化遺産」に登録されたばかりの大野郡白川村荻町合掌集落を訪問した。交流会では、長年合掌造りの伝統技法を守り、合掌集落を始め周辺環境の保全と整備に尽力してこられた合掌民宿「孫右エ門」の主人鈴木口茂さんと、世界文化遺産の登録運動に尽力してこられた若手村会議員の板谷克雪さんのご出席を得ることができた。尚、訪問に際しては白川村役場企画振興課長の南良則さんにもお世話いただいた。感謝申し上げたい。本学からの参加者は、一柳正和(経済学部教授、数学)、木村隆之(経済学部教授、経済政策)、内田忠男(経済学部教授、社会思想史)、三羽光彦(経済学部教授、教育学)、梅田守彦(経営学部助教授、会計学)、高橋信一(経営学部講師、情報処理)、鈴木誠(経済学部助教授、地域経済論)の7名である。

飛騨の白川村

白川村は、合掌造りの民家がわずかな平地に身を寄せるように立ち並ぶ静かな山里として有名である。標高は350メートルの地点から2702メートルの高さを誇る白山にいたり、村の標高差は2352メートルに及ぶ。隣村の荘川村に水源をもつ庄川が村の中央を国道156号線に沿って富山県へと流れ、その溪谷に17の集落が点在している。岐阜県下99市町村のうち3番目に広い面積をもつが96%は山林で、農耕地はわずか0.4%に過ぎない。そのため人の住めるところはわ

ずかしかないが、それだけ自然は豊かであり、また厳しくもある。

村の人口は、御母衣ダムなどを建設中の1960年、9436人にも達したが、その後水没集落からの集団離村や若者の流出が相次ぎ、95年2月現在1931人、542世帯(うち荻町は人口635人、152世帯)にまで減少し、過疎化と高齢化が進む日本の典型的な山村といえる。

ところで、人々の暮らしは、岐阜県南部の主要都市よりも、はるかに富山県との結び付きを強くもっている。医療はもちろんのこと、日常の買い物すら富山県の高岡市や砺波市に依存している。公共交通機関はバスが中心であるが、一日の運行数も少なく、遠距離交通には不便も多いことから、日常の足はもっぱら自家用車である。観光客の足も自家用車が中心のため、紅葉シーズンなどは村中で交通渋滞が深刻になり、山村ののどかな暮らしと生活の糧である観光振興との両立が今大きな課題となっている。

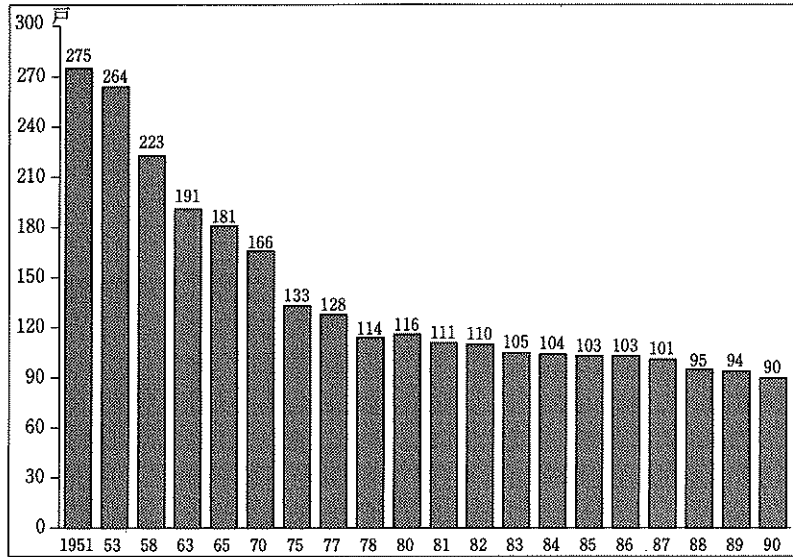
訪れてみたい合掌集落

県内には「白川」と名の付く町村が3つあり、実にまぎらわしいが、合掌集落をもっているのは白川村だけである。現在、村内の荻町集落には主屋59棟、付属屋(倉、ハサ小屋)50棟の合掌造り民家があり、庄川をはさんで荻町対岸にある「合掌造り民家園」には主屋9棟、付属屋14棟が移築され、この2地区を含め村全体では180棟の合掌造り民家が現存している。

荻町では、合掌の建物を維持するために相互扶助の組織「結(ゆい)」による助け合いの精神や火の用心に対する意識が高く、そのお陰で今日の姿が保たれていることを忘れてはならな

図1 合掌造り住居戸数表

(1991年1月現在)



(出典)『ひだの白川』白川村教育委員会1991年P33より

い。しかし、図1のように合掌家屋は年々減少する傾向にあったことから、1971年には村内に「荻町自然環境を守る会」という住民組織が誕生し、また76年には建造物を守るため村の「保存条例」もできて、住民と行政が一体となって合掌家屋の保存と合掌集落の維持に取り組むようになった。

条例で守られている建物は113で、住民にはこれら建物の外観を維持することが求められている。合掌造り以外の建物の新築や増改築などについても色彩・材料・高さなどに制限が設けられている。さらに1976年9月、荻町の合掌集落が国の「重要伝統的建造物群保存地区」の選定を受け、それに伴い白川村の人々は消火栓設備の設置、トタン屋根や瓦屋根を茶色に統一するなどの合掌造り集落の保全・景観づくりに努めてきた。その努力は、現地を訪問すれば集落の随所に見ることができる。

世界文化遺産とは

世界遺産とは、1972年のユネスコ総会で採択され、正式名称を「世界の文化遺産及び自然遺

産の保護に関する条約」と呼ぶ。この条約は、「社会的、経済的状況の変化などにより、衰亡・破壊の脅威にさらされている文化遺産及び自然遺産を締約国が集団で保護する」ことを趣旨としている。

この条約は1975年に発効されたが、日本が条約批准を国会で承認したのは1992年のことである。現在、日本では姫路城、法隆寺地域の仏教建造物、古都京都の文化財、白神山地、屋久島が歴史遺産に登録されており、今回の白川郷・五箇山の合掌造り集落が国内6番目の世界遺産ということになる。

登録対象面積は、荻町地区約45.6 ha（うち周辺緩衝地帯が約35.7 ha）、地区内の合掌家屋数は59棟、他に稲架（はさ）、小屋・板倉などが世界文化遺産に登録された。尚、白川郷が世界遺産に登録されるまでの歩みは、おおよそ表1の通りである。

合掌集落の世界遺産登録、そのプラスとマイナスの効果

〈困ったこと〉

表1 世界遺産登録までの歩み

▽1965年（昭和40年）
白川村内小集落の集団離村をはじめ合掌家屋の減少が著しく、地域住民の保存意識・運動が高まる。
▽1971年（昭和46年）
「荻町集落の自然環境を守る会」発足。合掌家屋を「売らない」「貸さない」「壊さない」の3原則の住民憲章を策定し、保存運動を推進
▽1976年（昭和51年）
白川村伝統的建造物群保存地区保存条例を制定。国の重要伝統的建造物群保存地区に選定される
▽1987年（昭和62年）
合掌集落の保存に必要な経費を捻出するため、白川村伝統的建造物群保存地区保存基金条例を制定し、翌年から募集を開始する
▽1991年（平成3年）
国の重要伝統的建造物群保存地区選定15年・守る会発足20周年記念行事を開催
▽1992年（平成4年）
世界遺産の一覧表掲載物件として、文化庁からユネスコへ推薦される
▽1995年（平成7年）12月6日
ドイツ・ベルリンで行なわれたユネスコ世界遺産委員会で登録決定、同月9日、世界遺産の一覧表に掲載

（備考）

「岐阜新聞」1995年12月13日付より

今回の世界文化遺産への登録は、白川郷の将来にどのような影響を及ぼしていくであろうか。少なくともプラスの効果を地域にもたらすには、次の諸課題の克服が前提といわれている。

第1は、合掌造りの技術の伝承問題である。保存運動の主役も60歳代から70歳代になった。合掌家屋の住民でつくる白川郷合掌家屋保存組合は、昨年11月にカヤの葺き替え技術を若い世代に伝える講習会を初めて開いたが、これは葺き替え作業の伝統組織「結（ゆい）」が住民間の共同体意識の希薄化にともない弱くなってきたことを受けて行われた事業である。

第2は、観光客のマナーの悪さである。人々の暮らしは、観光で訪れるツーリストの注目にさらされることになる。そのため、荻町の住民はツーリストの目を意識した日常生活を余儀なくされており、「洗濯物も干せない」といった窮屈な生活を強いられている。長野オリンピック後には、松本市など長野県南信地域の道路整備

を軸とした公共投資が加速し、中部縦貫自動車道などを利用して関東からの観光客が増加することが予測される。また富山空港が環日本海経済圏の空の玄関となり、韓国を中心に環日本海交流が活発化するものと思われる。その結果、富山空港から東海北陸自動車道を通り、東アジアや欧米の観光客の往来が頻繁になることも考えられ、合掌集落の人々の暮らしは、今以上に世界の人々の関心の的になるはずである。

第3は、葺き替え用のカヤの調達問題である。葺き替え用には、大型の合掌だと直径20センチの束が2万束も必要になり、毎年春には数件の葺き替えが必ずある。そのため村内でカヤを栽培するにも限界があり、全国から買い集めているのが実情である。そこで、このカヤ調達の窮地から逃れるべく、合掌民宿「孫右エ門」の主人鈴木口茂さんは葺き替え用のカヤの発芽率を上げる研究とカヤの収穫機械の開発に余念がない。使命感がなければ合掌造りは到底守っていくことはできないことの証である。

第4は、合掌集落の集客能力の限界問題である。白川村全体の入り込み客は1985年の54万5千人から94年の67万1千人へと漸増傾向にある。ところが、合掌集落への入り込み客数は1990年をピークに減少傾向に向い、しかも入り込みが一時期にかたよる傾向が強くなっている。

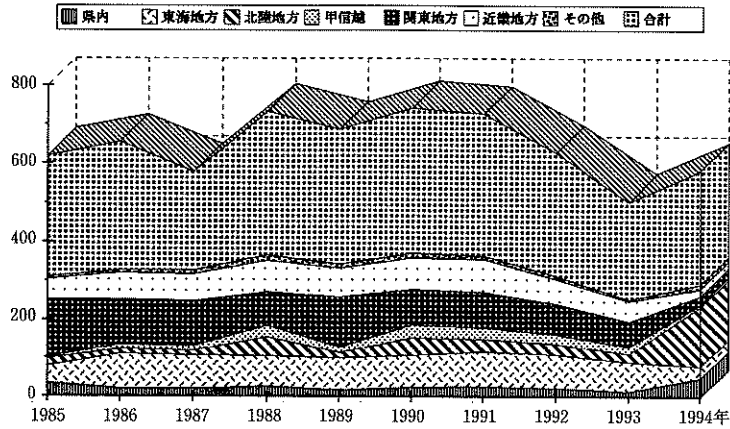
合掌集落への入り込みが減少している背景には、1) 近畿、関東、東海など大都市圏からの観光客がそれぞれ79%減、75%減、63%減というように大幅に減少している（図2参照）、2) 観光シーズンが7月－9月と4月－6月に集中し、しかも通過型の日帰り観光客が主体であるが、それら主要な観光客が大幅に減少している（表2参照）、3) 60歳以上の観光客が増加している反面、20代から30代の観光客が大幅に減少している（図3参照）、などの諸事象が働いていることを挙げることができよう。

〈期待膨らむ地域効果〉

反面、今回の世界遺産への登録で、次のような期待が寄せられていることも確かである。

第1は、Uターンによる若者人口の増加であ

図2 合掌集落への居住地別観光客数 (単位: 千人)



(備考)

【岐阜県観光レクリエーション動態基礎調査】各年度版より作成

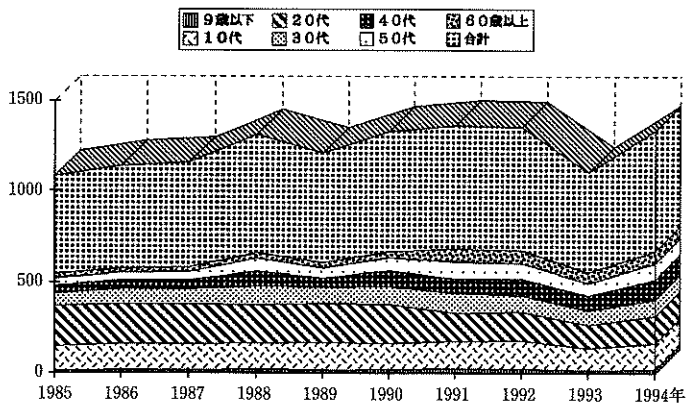
表2 合掌集落の四半期別観光客数 (単位: 千人)

	4～6月		7～9月		10～12月		1～3月		年間		合計
	日帰り	宿泊	日帰り	宿泊	日帰り	宿泊	日帰り	宿泊	日帰り	宿泊	
1985	71	13	121	24	62	13	5	1	259	51	310
1986	50	9	142	24	83	14	5	1	280	48	328
1987	51	8	142	22	83	14	5	2	281	46	327
1988	55	9	144	22	108	16	10	3	317	50	367
1989	48	7	156	19	90	16	6	2	300	44	344
1990	57	10	135	21	115	17	12	4	319	52	371
1991	56	11	130	24	110	17	11	5	307	57	364
1992	52	11	103	23	93	16	11	5	259	55	314
1993	37	6	90	21	72	15	8	3	207	45	252
1994	42	6	90	22	102	15	22	4	245	47	292

(備考)

図2に同じ

図3 白川村への年代別観光客数 (単位: 千人)



(備考) 図2に同じ

る。今回の世界遺産登録を契機に、合掌家屋の保存とその文化的活用に期待を寄せ、村に帰って村の発展に尽したいという若者が出ている。また、観光で訪れた女性との出会い・結婚で、村での生活に希望を持つ若者も出ている。事実、飛騨2郡（大野郡と吉城郡）で結婚を機にした転入と転出の差を見ると、転入数が最も大きいのが白川村であることが、それを裏付けている。このように古い家や頑固な生活様式を新鮮な価値観で積極的に受け入れようとする若い世代が着実に増えており、今後も増え続けていくものと思われる。今回の登録は、UターンやIターンによる若者の増加と結婚による若い世帯・子ども数の増加、賑わいある地域づくりに貢献するものと思われる。

第2は、世界遺産登録後、合掌集落あるいは

白川村に寄せる期待が高まり、周囲の支援体制が少しずつ整い始めたことを挙げるができる。将来、白川郷の合掌集落は、関西新国際空港や富山空港の拡充、中部縦貫自動車道や東海北陸自動車道の開通、白川村の何倍もの集客能力をもつ福井の温泉観光や信州松本の山岳観光といった観光圏に左右されながら、多くの観光客を迎え入れていくことになるであろう。しかし、合掌集落に暮らす人々は、今回の登録運動を経験し、観光優先の生活には極めて慎重である。自らの生活場所が、同時に世界の文化遺産となる訳で、それ故に合掌造りの文化を学び、ともに守っていく関係を観光客の人々にも強く求めている。

表3のような一連の動きには、観光開発が人々の伝統的文化的生活を奪ってきた歴史を繰

表3 合掌集落周辺の社会環境変化（1995—96年）

- ◆飛騨環状道路の実現へ向け協議会を計画。すでに地元では高山市と大野郡、吉城郡の全町関係者で「飛騨地域道路網計画研究会」を組織し研究を開始。既存道路を流用して、平湯温泉、新穂高温泉、天生峠、白川郷、荘川桜などを結び、観光客を高山市の一極集中から分散させることで、飛騨地域全体の振興に役立てる計画。
- ◆10月20日の文化財保護審議会で、白川村の合掌造り家屋として最大級の規模を持ち、格式の高い構造を持った和田家住宅（母屋、土蔵、便所、土地）が、国の重要文化財に指定。白川郷の合掌造り家屋では、旧遠山家住宅に次いで2例目だが、萩町の伝統的建造物群保存地区内では初の指定。
- ◆12月6日、ユネスコ世界遺産委員会は、白川村と富山県平村、上平村に残る「白川郷、五箇山の合掌造り集落」を文化遺産として世界遺産一覧表に登録することを決定。国内6カ所目の登録。
- ◆白川郷などの岐阜県の観光情報が、国際観光振興会のホームページで紹介。インターネットを通じて世界に情報発信を開始。
- ◆岐阜県が新年度から白川村と協力して「世界文化遺産白川郷合掌集落保存財団」（仮称）を設立。白川村の白川郷集落保存基金の積立金3億円と合わせ4億5千万円の基金で開始。主に、1）海外の文化遺産保存先進地などへの研修団派遣、2）保存対策、3）地元の文化伝承に関する学術研究、などを事業とする。
- ◆4月18日、東海北陸自動車道の美並一郡上八幡インターが開通。毎冬156号線の渋滞で困っている八幡町の住民は一様に歓迎したが、若者の流出や高山、下呂、白川郷への観光通過地点になることも危惧された。
- ◆県内の東海北陸自動車道沿線の24市町村が、観光を中心テーマとした地域活性化に連携して取り組む「日本まん真ん中街道連合」を結成。県が2分の1の補助をし、観光資源の再発掘、歴史文化遺産の再評価、イベント開催、観光ガイドマップ作成、全国PR等を繰り広げ、交流人口の拡大と沿線観光産業の振興、広域的な村づくりを進める。
- ◆岐阜県が平成11年に開催する第14回国民文化祭の基本構想を発表。白川郷の合掌造り集落を主役にした「世界文化遺産フェスティバル」等を主な事業とする予定。
- ◆白川村の萩町合掌集落が富山県の2集落と共に世界遺産になったことを祝う2県3村合同式典を4月22日開催。席上、集落の保存と地域振興に協力し合うための「飛騨世界文化遺産保全会議」設立を決定。この会議に対し白川村の研究会が、1）合掌造り家屋の保存、2）観光客の受け入れ、3）防災対策、4）交通アクセス、5）駐車場整備、等の政策や問題を提起。また、これを支援するため、県が遺産保存部門と地域づくり部門の二つの幹事会をつくる。白川村では当面、観光客増を見越して駐車場を整備中。
- ◆白川村飯島の国道156号線沿いに4月26日、県内で10カ所目の道の駅「白川郷」がオープン。

（備考）

「中日新聞」1995年4月から1996年5月までの記事より抽出し作成。

り返すことを許さず、こうした白川村の人々の
願いをしっかり受けとめ支えていく支援体制を
つくっていくことが強く求められている。

(追記)

本稿の作成に当っては、岐阜県企画部観光課、
同教育委員会事務局指導部文化課のご協力を得
ました。文末ながら感謝申し上げます。